

さがみ

No. 81 Oct. 2008

子どもたちにとっての読書……………	1
ワシントン大学図書館での研修に参加して……	2
パブリック・サービス研究分科会に参加して……	5
目録システム講習会に参加して……	6
ブックトーク……………	7

子どもたちにとっての読書

相原 貴史

新1年生の教室に「はい！」と元気のいい声が響きます。これから行う作業の説明をし、分かったかどうかの確認をしたことに応えての返事です。きちんと座って聞いてもいたので、安心して早速作業の開始を指示します。すると、次々と子どもたちがやってきて「先生、何するの？」と尋ねるのです。結局、ほぼ全員に説明をし直すことになりました。

この原因を今振り返ってみると、この時期の子どもが、自分個人に相對してくれる人の話しでないと受け止められないという傾向を持つことが挙げられます。また、それまでの生活経験にないことばが用いられると、具体的にとらえられないという傾向を持つことも挙げられます。

そんな子どもたちのために、小学校1年生の教科書は、挿絵が多く使われています。挿絵が、子どもの経験の想起を促し、ことばやお話の表す内容の理解を支えてくれるからです。

この時期の子どもたちに絵本の「読み聞かせ」を行うと、ほと



読み聞かせを楽しむ1年生↑
←次第に自分たちでも



んどの子どもが挿絵を食い入るように見ながらお話を聞きます。一つ一つの絵をよく見たりその変化を見つけたりしながら、お話の流れをとらえているようです。ですから、登場人物が転んだような場面では、挿絵からその様子をとら



え「〇〇ちゃん泣いてる。痛いんだね。」などと、自分の経験とつないでその心情が共感できたりします。

このような気づきを交換できるようになると、子どもたちの中に、次第に同じ事物や心情などをとらえる共通のことばが育ってきます。そして、同じお話を元に、場の共有を楽しめるようになります。その結果、子ども集団の中に、相手理解に基づいたコミュニケーションが生まれるようになるのです。

だからこそ、子どもにとっての読書では、単にその作品の内容を正しく理解するというより、そこに表されている情景や心情を自分の経験と結んでとらえ、それをことばとともに仲間と共有できるようにすることが大切にされる必要があるのです。

今、図書館の中でも、読み聞かせをしてもらえるコーナーや、本に記されていることを元に子どもが体験活動できるコーナーなどが設けられるようになりました。そのような場を生かし、子どもたちが、本との出会いをより実感的に行うことができ、人の気持ちを受け止めることばをよりたくさん共有できるようになってほしいと願っています。

もしかすると、今、このような読書を上の子どもの人にも味わってもらう必要があるのかもしれない。

ワシントン大学図書館での研修に参加して

私立大学図書館協会と国際協力図書館委員会が主宰する2007年度海外集合研修に2008年3月2日から3月8日までの期間で参加しました。この研修は、「アメリカの大学図書館の現状を知る」ということを主たる目的として実施されました。事前に、研修参加の動機や学びたいことなどを中心とした面接による選考がありました。私は、アメリカの大学図書館における情報リテラシー教育とラーニング・コモンズに興味があったので、文献だけ読んでわからないことを中心に、実際にアメリカに渡って学んで来たいという思いを面接で伝えました。選考通過後は、他大学の研修参加者と連絡を取り合い、実際にどういったことを学びたいかなど、夜遅くまで議論する日々が続きました。

3月2日成田空港を出発し、渡米。ワシントン州に到着し、ホテルに荷物を置くと、休む間もなくワシントン大学へと向かいました。ワシントン大学は1861年に創設され、Seattle、Tacoma、Bothellの3つのキャンパスにおよそ4万人の学生が通う州立総合大学です。私達が訪れたシアトルキャンパス内には中央図書館(Suzzallo&Allen)、学部生用図書館(Odegaard)の他に諸専門図書館が18館あります。実際に訪れてみると大学の大きさだけでなく、中央図書館のあまりの大きさに誰もが圧倒されました。



[Suzzallo Library 正面]

ワシントン大学の図書館は、「知識の保存と発展・普及」という大学の理念に基づき、「生涯教育として自分を再教育できる人間を育てる」という志の

もと、“user-centered Library”、“any time and any place”(いつでもどこでも利用者が利用しやすい図書館)を明確な目標に掲げて、利用者による図書館評価も積極的に実施しています。なぜここまで積極的に利用者による図書館評価を活用しているのかというと、図書館を改善する目的に利用するのは勿論ですが、アメリカでは大学だけに限らず、図書館なくしては授業が成り立たないようなカリキュラムが組まれているからです。そのために、大学として図書館の存在というものを非常に重要だと捉えているように感じました。

日本とアメリカの図書館の大きな違いの一つとして、司書という資格制度の違いがあります。司書は本学でも取得できる資格の一つですが、アメリカでいう、Librarianというのは学部卒で取得できる日本の司書資格とは異なり、図書館学の修士号以上を取得した専門職として扱われます。また、ワシントン大学では、図書館学以外の修士号を併せ持つSubject Librarian(専門的分野をもったLibrarian)の方が多いようでした。身分も大学職員ではなく、教員(研究職)となります。そのためか、一人ひとりの志も高く、お話を伺っているだけでも、自分ももっと勉強しなければと強く感じるほど意欲的でした。Librarianは交代でレファレンス・デスクに座り、利用者などからの専門的な質問を受けますが、それぞれに個別のオフィスがあり、利用者はLibrarianの専門性に合わせて質問にいきます。大学図書館のホームページを開くと、それぞれのLibrarianの自己紹介ページがあり、どのLibrarianがどういった専門分野を持っているのかということを知ることができるようになっています。

また、学生と直接対話することの少ない仕事をしている図書館員(Librarian以外にも目録作成など様々な職員が図書館では働いています)は、希望すれば図書館入口にあるインフォメーションデスクに1時間交代で座ることができます。インフォメーションデスクとは、日本では馴染みのないものですが、利用者から受けるあらゆる質問を的確な場所に振り分けるためのものです。資料に関する質問であれば、最適なLibrarianを紹介します。



[Suzzallo Library インフォメーションデスク]

その他にも学内情報検索システムを利用し、ATMの場所など学内のあらゆる質問にも回答します。このようなシステムが本学にも導入されれば、学生さんの利便性は飛躍的に向上するのではないのでしょうか。インフォメーションデスクは、色々な利用者が様々なことを尋ねてくるので非常に面白く、また、利用者と直接接することにより、様々な工夫やアイデアを生み出すきっかけになるからと、Odegaard図書館の館長も自ら志願してカウンターに座っています。

このように、今回の研修では、日本にはない図書館のシステムやまだあまり導入されていない事例について学ぶことも大きな目的でした。今回の研修に参加して、本学の図書館にはない制度として以下の3点について非常に興味を持ちましたので、紹介したいと思います。

● コモンブック (全学共通指定図書)

毎年、新入生全員に1冊同じ本を無償で配布しています。その本を全学部の全学生が読み、レポートを作成したり、学生同士でディスカッションをおこないます。とてもシンプルな取り組みに思えますが、全員が共通の本を読むことで、コミュニケーションのきっかけになるなど、非常に大きな教育効果をあげているそうです。ただし、多民族国家のため宗教や国籍に関係なく全員が読むことのできる本を1冊選ぶという作業が非常に難しいとのことでした。この本は、毎年Librarianである学部図書館の館長を中心に選ばれています。

● ラーニング・コモンズ

ラーニング・コモンズとは様々な情報を一箇所得

て、活用して、発信できる場所のことです。日本では聞きなれないものですが、ワシントン大学では学部図書館全体がラーニング・コモンズという機能を有しています。図書館というと図書館員だけが働いている印象を持たれがちですが、図書館以外の部署とも連携して、例えばパソコンの質問にはシステム担当部署の職員が、授業に関することであれば教員や大学院生などが対応に当たっていました。これだけ聞くと、ラーニング・コモンズが図書館である必要はないと感じる方もいるかもしれません。しかし、図書館であることに意義があるのです。アメリカでは図書館を利用した教育プログラムが組まれています。そのため、図書館を利用しないと授業が成り立ちません。そのことから、図書館に来れば、紙媒体の資料も手に入れることができるし、web情報も手に入れることができる。更に、必要な情報を加工・発信するスタジオやワークステーションがあったり、ありとあらゆる情報を1箇所ですぐ入手し、加工し、発信することができる場所であるということが大切なのです。また、設備だけではなく、図書館員がいて、システム担当者がいて、専門的なLibrarianがいて、そういった人的支援も受けることができ、それを求める多くの利用者がいる。それらが全て揃って初めてラーニング・コモンズという場所になるのだと改めて感じました。勿論、長時間滞在できる環境づくりも大切です。本学の図書館では、まだまだ施設面においてワシントン大学には遠く及びません。しかし、人的サービスを向上させることで少しでも利用者の方々の満足度が上がるよう、今後は他部署との連携や授業内容の理解など、図書館員一同ますます努力していかねばならないと思います。

● ライティング&リサーチセンター

ラーニング・コモンズの中の1つです。チューターと呼ばれる相談員(主に大学院生)が、直接学部学生を対象に、論文を執筆するための資料調査法や論文の内容構成などについて1回45分程度、1対1でアドバイスをおこなっています。内容によっては、Librarianとチューターが連携して学習支援を実施することもあります。ワシントン大学では、基本的に情報検索はLibrarianへ。論文作成指導はチューターへととなっているようですが、Librarianとの連携も多く、必要な人たちが部署の垣根を越えて学生を全力でサポートしているように感じました。このライ

ティング&リサーチセンターは、全米の図書館では一般的なものだそうですが、日本の大学図書館にはまだ殆どこういった施設はありません。

研修参加前に、日本で色々な文献を読んでいたときは、「日本にはこんな施設を作るお金がないから無理そうだな」と正直思っていたのですが、今回実際にラーニング・コモンズやライティングセンターを見てみて、自分の考えがとても浅はかだったと感じました。施設があるというのは勿論ですが、実際は他部署の人々と連携したり、人材を育成したり、利用者に広報したり、図書館利用者調査を定期的実施し、改善を繰り返したり。よい大学、よい図書館にしているためにはどうしたらいいのかと、試行錯誤を繰り返しながらも、日々惜しみない努力をされている図書館関係者の方々がいるからこそ、素晴らしいサービスが提供できているのです。こういった人々の姿勢には、本当に頭が下がる思いでした。私達司書や図書館員の努力や意欲次第で、どのようにでも図書館を変えることが出来るということに気づくことが出来たことが、今回の研修の本当に大きな成果だったと感じています。

【シアトル公共図書館】



【シアトル公共図書館外観】

シアトル滞在最終日にシアトル公共図書館を訪れました。シアトル公共図書館は、今回訪れた中央館と26の分館があり、中央館は2004年5月に新築されました。図書館と建築アートが融合した「魅せる図書館」がコンセプトで、館内のいたるところに、ユニークで斬新な試みがちりばめられていました。そのため、真っ黄色のエスカレーターや、何から何まで全てが真っ赤なフロアなど、とうてい図書館とは思

えないような印象を受けました。シアトル公共図書館は1日の来館者数がおよそ5000人という非常に大きな公共図書館です。館内には400台以上のパソコンが設置されているほか、無線LANなども整備されていました。また、環境問題にも配慮して設計されており、成長の早い竹を床材に用いたり、雨水を館内植物用に利用したりと、グリーン・ビルディングでもありました。また、表参道ヒルズのように坂を利用して、6階から9階まで階段を昇らずに、1本のスパイラル状に書架を回っていけるようになっているところが特徴的でした。その他にも、図書館の外に設置してあるブックポストや、カウンターで本を返却すると、本が吸い上げられて中二階にある仕分け所に運ばれ、機械が自動的に請求記号順に本を並べ、ブックトラックに並べていってくれるという仕組みがありま



した。それはまるで工場のように、初めてみる光景に非常に驚きました。

最後に、海外でも日本人図書館員(Librarian)の方がたくさん活躍しています。以前の館報さがみでも、マニトバ州立大学の図書館の吉田さんを紹介しましたが、今回お世話になったワシントン大学でも、Subject Librarianの横田さんと目録担当の橘さんという日本人の方が活躍されていました。図書館司書として海外で活躍されている日本の方々とお会いでき、色々なお話を伺う機会があることが非常に嬉しく、また励みにもなります。司書課程を受講している皆さんの中にもいずれは海外の図書館で活躍する方がいるかもしれませんね。皆さんの活躍を楽しみにしています。

(司書 中戸川陽子)

私立大学図書館協会東地区部会研究部 パブリック・サービス研究分科会に参加して

私は、山梨県の石和で8月25日から8月27日の2泊3日の日程で実施された「2008年度パブリック・サービス研究分科会・夏期研究合宿」に参加しました。

合宿初日は、「大学図書館を魅力的な現場にするには」というテーマで講師による講演が行われ、その後、(1) 図書館員と利用者の価値観について (2) 10のプロフェッショナルの検証 (3) 図書館員のキャリア (4) 主題書誌作成による主題知識の獲得 (5) 金の動きからみる今後の図書館という五つのテーマ別に分かれて研究を行いました。

私は、テーマ(3)の研究グループに入りました。内容は、現在の図書館事務部門のトップが経験した部署で得られたキャリアが、今どのように活かされているのか等を調査し、どのような経験を積んでいけばそのような人材を育成することができるのか、方法の構築についてディスカッションを行いました。

また、もう一つの検討課題として、入職時から司書として図書館に配属された館員と、人事異動により図書館に配属された館員には、時として軋轢が生じることがあるが、専門知識を持たない館員をどう育成していくのか。

一方、他部署をいろいろ経験し、図書館に配属された事務系職員が持つ新鮮なアイデアと他部署での経験をどのように活かすことができるのか。そして、両者が図書館サービス向上のために共存する方法を見つけ、課題に取り組み、結論を見つけていく作業にとりかかるための行程についてどのようにすすめていけばいいかを検討しました。

今回の研究分科会に参加するに際して、図書館での経験や知識が十分でないことから不安がありましたが、今回の研究分科会は図書館の人事運営に関する話を中心に、現在、同様の問題を抱えている私にとっては大変参考になりました。しかし、この研究会で学んだ大きなテーマは図書館員として忘れてはいけないことであり、大学図書館においては、利用者中心で、利用者にとって本当に使いやすい図書館であることが最も重要であることを痛感いたしました。

(総務係チーフ 北原恵美子)

「ILLシステム講習会に参加して」

利用者の方で、ILLを知っているという方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。実は私自身、4月に図書館に配属されるまで知りませんでした。ILLとは、Interlibrary Loan (図書館間相互協力)の略で、ILLシステムは本学で所蔵していない本や雑誌を、どの図書館が所蔵しているか調べ、所蔵している図書館から必要部分のコピーを取り寄せたり、現物を借りたりする際にその依頼等ができるシステムです。相互協力ですので、本学が他大学からの依頼を受け付ける時にも使います。

このシステム講習会は初心者を対象に開講され、受講に当たっては、e-ラーニングによる事前学習と、事前テストで70点以上の成績を取得することが義務付けられました。講習会当日は、主催するNII (National Institute of Informatics: 国立情報学研究所)が会場となり、全国各地の図書館から参加者が集まりました。講習会は事前学習の内容を踏まえ、端末を前に、テキストや画面を見ながら、ILLシステムの流れやその操作方法等について講師の説明を聞き、実際に自分で端末を操作しながら学ぶという形式で進められました。

この講習会で印象深かったのは、ランチ懇親会です。各自が昼食を持ち寄って、昼食をとりながら交流するというものです。途中から講師も参加し、それまでは黙々とキーボードを叩いていましたが、この時にはお互いの情報を交換し、その話の内容から、参加者の方々が利用者のことを考え、日々尽力されているのが伝わってきました。ILLシステムを通じて、端末で簡単にいろんな処理ができてしまいますが、その画面の向こうには、こういった方々がいらっしゃるのだということを実感しました。

図書館で目的の本や雑誌が見当たらず、そのまま帰ってしまうという学生さんも多いのではないかと思います。図書館にはILLシステムという便利なものがあるので、諦めて帰らずに、是非利用してください。申し込みはレファレンスカウンターで受け付けています。コピーには1枚当たりの複写料金と送料、現物を借りる際には往復の送料が利用者負担となります。不明な点がありましたら、カウンターまでお問い合わせください。スタッフ一同みなさんの利用をお待ちしています。

(閲覧係チーフ 古越奈央)

目録システム講習会に参加して

平成20年5月21日～23日の3日間、国立情報学研究所(N I I)にて「目録システム講習会図書コース」を受講した。

目録システム講習会とは「目録所在情報サービス参加機関の目録業務担当者が共通に理解しておくべき、総合目録データベースの構成、内容、データ登録を修得する機会を提供する」ことを目的にN I Iが毎年行っている教育研修事業で、図書・雑誌の2コースがある。私が参加した図書コースの回では31機関、34名の参加があった。講習の到達目標は「目録情報の基準、コーディングマニュアル等適切な参考資料を参照しながらNACSIS-CATへの所蔵・書誌登録、書誌修正、目録情報の入力業務を行うことができるようになる」ことであり、今年度より受講者は事前に「セルフラーニング教材」により基礎的事項を自己学習し、事前学習修得テストを受け合格しておくことが必須となった。会場では一人1台端末が貸与され、テキストに沿って講義と課題集による実習をこなした。单元毎に「セルフチェック」という小テストがあり、自分の未理解な点をその都度確認でき、随所で講師から質問も受ける為、なかなか気が抜けない内容であった。受講者の前提知識として、「目録業務・目録規則の概要について理解している。その規則を適宜、関連資料から参照できること」とある。

しかし、実際には受講者の知識量と経験は様々で、書誌を一から作成する作業に手間取っている受講者(私)もいれば、課題をこなし、その時間を持て余す方もおり、実務経験の幅を感じた。各々の図書館で目録規則を学べる体制が無く、目録に精通した職員が減少していることを考えると、今回の講習は基本を再確認するという点で有意義であったが、このような講習会も初心者向け、経験者向けといったレベル別の講義があれば、とも感じた。

日々目録作業に従事して思う事は、規則を遵守して作成した目録が、果たして当館利用者(学生・先生方)にとって利用し易いものであるのか、という疑問である。新学科の設置により、今年度から以前には無かった資料も加わり、相模女子大学の蔵書目録にはまだ未整備のものも多々ある。講習会で修得した知識を元に今後の業務に活かし、より利用し易く、質を維持できる目録作成作業をしていければと思う。

(整理係 朝倉淳子)

平成20年度 主要購入資料紹介(1)

平成20年1月以降の図書館運営委員会において、購入決定された資料の中から紹介します。

*DVD 英語授業の実践指導事例集 ジャパンライム

今年度より設置された英語教育コース用の教材として推薦されました。英語教育の現場で実際に活躍されている先生方の指導事例を集めたものです。授業の構成と進め方のコツが解る豊富なアイデアを用いたユニークな指導の数々が収められています。教育実習前の参考に役立つのではないのでしょうか。

*DVD 生体のしくみ 医学映像教育センター

複雑な側面を持つ人間の、「生物学的に人間とはいかなる存在なのか」をテーマに企画された看護教育映像です。解剖学、生理学、生化学の要素が幅広く取り入れられており、実際の解剖や、アニメーション、イラストでわかりやすく解説されています。栄養士および管理栄養士を目指す学生に適した教材であり、授業や自己学習においても役立つものです。

*ビデオ実践日本語教授法 日本言語研究所

日本語教育に関連する科目においては、日本語教育学に関する知識を習得するのみでなく、日本語教師としてのスキルを身につけることも必要である。本学においては学内で実際の教育現場を見学することはできないため、それを補うために有効な資料であると、推薦されました。

*教育基本法問題文献資料集成 日本図書センター

教育基本法が制定されてから約60年。戦後の教育の基軸であるこの法律がどのように理解されてこれまで歩んできたかを、主要文献・雑誌・議事録・判例などの関連資料から理解できるものです。

*戦後女性雇用資料集成 日本図書センター

女性が労働にたずさわる場合、もっとも大きな困難にぶつかるのは、妊娠・出産・育児等の働きと責任が生じた場合です。この資料集は託児所の実情、働く婦人と保育など保育関係を含め、ジェンダー関連資料として非常に価値のあるものと考えられます。本学の広い範囲の学生の利用に有効です。

ブックトーク 19

食堂かたつむり 小川糸 ポプラ社 913.6 || O

同棲していた恋人に、それまで蓄えたレストラン開店資金や家財道具一式を持ち逃げされた衝撃で声を失った若い女性が主人公。彼女が母の一人住む故郷へ都落ちし、実家の離れで食堂を開くところから物語は始まる。

『食堂かたつむり』は、一日に一組の予約客しか扱わない。決まったメニューは無く、事前に面接やメールなどで客の人柄や心理状態を把握し、相応しいメニューを作り出すスタイルの店だ。そこで食事をした客に起こった不思議な出来事がきっかけとなり、いつしかその食堂で食事をするとうれいごとが叶うという噂が広まって、いくつかの人間模様が織りなされていく。

著者の小川糸(カワ イト。女性)は'99年、文芸誌に短篇を発表する事で作家としてのスタートをきり、その後もいくつかの短篇を発表していたが書籍の発刊には至らなかった。本作は著者曰く『苦節10年、ようやくのデビュー作』なのである。しかも元々は第1回ポプラ社小説大賞で最終選考すら残らなかった作品。にも係わらず、編集者の目に留るといふ幸運に恵まれた結果、'08年1月に発刊され、春にTV番組で紹介されたのが契機となり注目を集めた。マスメディア恐るべし。

作品の設定上そうなったのか著者の趣味の表れか、作中では食材の調達や献立の描写にこだわりが見られ、非日常的な食の風景が繰り返され、広がられる。

この著者は'04年より作詞家・春嵐(シュラン)としても活動中で、浜田省吾や夫でもあるアレンジャーの水谷公生と共に3人で音楽制作チームFairlifeを結成しており、これまでに奥田民生や岡野昭仁ら豪華な顔ぶれをゲストシンガーに招いて、2作のアルバムを発表している。

作詞家としての経験年数の方が長いせい、はたまたケータイ小説台頭の影響か。小説の文体は短く、平易で淡白。食という生活に密着した内容を描いているにも係わらず、リアリティから程遠いところで話は進む。毀誉褒貶が激しそうな本ではあるが、短時間で1冊を読みたい人や、いわゆる今時の読み物を好む女子には丁度良さそうな一冊。

(閲覧係 横堀愛理歌)

ブックトーク 20

R D G レッドデータガールはじめてのお使い
荻原規子 角川書店 913.6 || O

主人公の名前は鈴木泉水子(いずみこ)。赤ぶちメガネに腰までとどく長い二本の三つ編み(ひそかに周りからしめなわと呼ばれている)。霊山、玉倉山の神社に住んでいて、悩みはどこか自分がクラスの女の子たちと違うと感ずること。しかもクラスの友達には「卒業したら巫女さんになるの」と言われる始末。「変わらなくちゃ」と思った泉水子は、まず手始めに長年自分のトレードマークだった髪型を変えた。それは前髪を切ったという些細なことだった。しかしそれをきっかけに、同じクラスの和宮くんが気になりだしたり、学校中のパソコンを壊してしまったり、突然父の友人、相楽がヘリコプターで迎えに来たり、望んでいた当たり前の女の子の生活が遠ざかっていってしまう予感がした。

高校進学に向けて自分を変えていくためには神社を出ることが必要であると思った泉水子は、寮がある地元の高校に進学したいのに、なぜか父親に東京の高校を薦められる。しかし内向的な性格である自分が東京でやっていけるはずがない。泉水子は東京の高校の話は断ってしまう。その結果、昔馴染みの少年、相楽の息子である深行(みゆき)が泉水子の中学に転校して来てしまった。本当なら東京の高校で会うはずだったと言う。泉水子が東京の高校に行きたくないと言ったため、転校させられて来てしまったのだ。不本意な転校に深行の泉水子に対する態度は最悪。なぜこんなことになってしまったのか。祖父は彼らが山伏であり、泉水子は山伏に守られる一族であるからと説明する。

現代を舞台にしたファンタジーです。魔法や妖精は出てきませんが、日本が舞台ということもあり神様や化け物(?)が出てきます。化け物がだんだん迫ってくるところは、ドキドキハラハラします。この物語はシリーズ物の1巻ということもあり、まだまだ謎になっている部分がたくさんあります。

これから高校に進学した泉水子がどう成長していくのか、深行との関係がどう変わっていくのかとても楽しみです。ぜひ一緒に泉水子たちの行く末を見守ってみませんか。

(日本語日本文学科4年 関根佐知子)

LIBRARY CALENDAR

10							11							12						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4							①		1	2	3	4	5	6
5	6	7	8	9	10	11	2	3	④	5	6	7	8	7	8	9	10	11	12	13
12	13	14	15	16	17	18	9	10	11	12	13	14	15	14	15	16	17	18	19	20
19	20	21	22	23	24	25	16	17	18	19	20	21	22	21	22	23	24	25	26	27
26	27	28	29	30	31		23	24	25	26	27	28	29	28	29	30	31			
							30													

無印:月～金 9:00～20:00、土 9:00～17:00

■印:休閉館日 ○印:開館時間短縮日(平日17:00、土12:30まで) □印:開館時間延長日(20:00まで)
但し、変更する事がありますので掲示にご注意ください。



◇各種ガイダンスのお知らせ

「卒業論文作成のためのガイダンス」
学部3年生を対象に卒業論文作成のためのガイダンスを実施します。学科ごとに卒業論文に必要な資料の収集・整理方法等を説明します。

「電子ジャーナルのガイダンス」

大学院生を対象に電子ジャーナルのガイダンスを実施します。

※ガイダンスの詳細については掲示・HPでお知らせします。この機会に図書館に足を運んでください。みなさんの参加を待っています。

◇児童書コーナーの開設

これまで文学の棚に配架していた児童書を1階雑誌コーナー付近に移動しました。これは、4月から学芸学部子ども教育学科が新設され、新たに紙芝居を購入したことによるものです。図書館では児童書コーナー開設を記念し、10月中旬から12月中旬まで2階展示コーナーで児童書の展示を行います。

◇書架耐震工事の実施

9月1日(月)～5日(金)に1階の書架の一部(総記～文学)を床に固定する工事を行いました。

◇MobileOPACサービス開始

携帯サイトからもOPAC(蔵書検索)が利用できるようになりました。

<http://lib.sagami-wu.ac.jp/mobileopac>



— 春学期実施のイベント報告 —

◇各種ガイダンス

「図書館ツアー」新入生向けに館内を回るツアー。
「OPAC」蔵書検索の方法を身につける。
「情報の達人」レポート作成のための文献探索。
「卒業論文作成のためのガイダンス(4年生向け)」
秋学期に実施する3年生向けのものと同内容。

◇雑誌・図書のリサイクル市

◇展示(仕掛け絵本、絵巻物語)

本号から、編集委員が交代致しました。
北原恵美子(委員長)、横堀愛理歌、清水暁美

【編集後記】

夏休みも終わり、秋の気配を感じるようになりました。今年の夏は、天候が不順で大雨による土砂災害が起こった地域もありました。

また、北京オリンピックが開催され、テレビなどにかじりついて夢中になって応援してすごした方もいらっしゃるかと思います。

これからは、芸術の秋です。
読書をして、秋を満喫するなんてちょっと素敵だと思いませんか？

図書館にお越しただいて読書をしていただくもよし、気にいった本を借りて、自宅で秋の夜長を自分流で過ごしてみることも素敵だと思います。

どんな形でもいいと思います。学生時代にたくさん本にふれてみてください。(北)